

ボランティア活動を通して

林 美緒

私は GW を利用し、東北地方太平洋沖地震で被災した町にボランティアをしに行かせていただきました。地震が起きてすぐに「何か自分に出来ることはないか」と思い、学生ボランティア団体「Youth for 3.11」に登録しました。「Youth for 3.11」とは、東京の学生が立ち上げた学生のみで運営された組織で、そこに登録した全国各地の学生を民間のボランティア団体などに送り込むというを行っています。学生たちは約一週間、民間ボランティア団体のスタッフと共に被災地でのボランティア、または被災地以外での後方支援を行います。

私は気仙沼公民館で一週間、炊き出しをしてきました。公民館に初めて入った時に思ったことは、「暗い所に人がひしめき合っている」でした。また、お年寄りが多く、若くても 40 代くらいの方がいた程度だと思います。およそ 250 人が 5 つのホールで衣食住を共にしています。ホールとはいっても、そのうちの 4 つはとても狭いものです。床は畳でなく温かみのないもので、その上に段ボールと毛布を敷いています。寝る場所も食べる場所もおしゃべりをするのも、全てそこでします。腰が痛いおばあちゃん、認知症のおばあちゃんを介護するおじいちゃん、車いすで思うように体の動かない人、集団生活に溶け込めず廊下のソファで一日過ごす人、いろんな人たちがそこで暮らしています。

また他の避難所ではノロウイルスや O-157、食中毒、肺炎が起こっているそうです。避難所は衛生管理や健康管理があまりにも不十分であることと、精神的ストレスが溜まるなど心の問題も抱えています。

炊き出しが始まったのは 4 月最後の週からで、それまでは菓子パンとカップラーメンしかなかったようです。炊き出しで主に調理をしてくれたのは、三人の地元の調理師さんたちで、私たちは洗いや野菜を切るなどの下ごしらえをしていました。私たちボランティアが炊き出しをするのではなく、地元の調理師さんが炊き出しをするのは、自立につながるからだそうです。これはボランティアに行く前から知っていたので特に疑問を抱きませんでした。しかし調理師さんたちと話をしていると、実は調理師さん全員が被災していて、自分たちの家や店が流されていたのです。気仙沼公民館とは違う避難所で生活しているため、炊き出しが行われる昼と夜に気仙沼公民館に来ています。三人のうちの一人、調理師 S さんは割烹料理屋の 4 代目で、見習いや修行を経て、やっと親から店を引き継ぐことができた時に地震でその店を流されてしまったそうです。班のみんなで S さんの店の跡に行ってきましたが、店があった形跡がありませんでした。机や椅子、店があったという証になるものを探しましたが、本当に何もないのです。ちょうど S さんが来て、呆然としている私たちに「店が流されたのなんてまだマンだよ。高台に登って助かったけど、流されている人たちを見ているだけで、助けられなかった。それが辛い。みんなにはこの現状を若い人たちに伝えてほしい。テレビでは絶対わからないから。」と言われました。

調理師さんたちは、ボランティア団体から炊き出しの話を持ちかけられた時とても嬉しかったそうです。自分の職を活かし、気仙沼の人たちの支えになれると思ったからです。そんな調理師さんたちを私はとても強く素敵な人たちだと思いました。自らも被災し、家や店を流され、私には想像もつかない程の辛く悲しい思いをしているはずなのに、どうしてまだ誰かのために頑張り、そこに幸せを感じる事が出来るのだろうか。何もなくなってしまったこんな時だからこそ、何か自分に出来る、たとえ些細なことでもいい、そんな頑張れることを探しているようでした。

ボランティアも数日すると、毎日の生活リズムにも慣れ、公民館で生活している人たちと話す機会も増えてきました。「何か食べたいものはありますか」と聞くと、「今のままで十分美味しいですよ。若い人が来ると明るくなっていいね。」と言われたり、「どこから来たの？遠いところご苦労さま。」と感謝されることが多くありました。公民館の外には自衛隊のお風呂があり、午前と午後で男性と女性が入れ替わり入浴することが出来るようになっていました。私も一度入り、そこでもいろんな人たちと話すことが出来ました。そこでも「来てくれてありがとう。」とか「若いのにすごいね。あなたたちのおかげで復興できるよ。」とってくれました。「次は観光で来ます。」と言うと「ぜひ。必ず立ち直って素敵な気仙沼に戻るね。」と言ってくれました。私が話すと、誰も辛く悲しいことを言わず、明るく話してくれました。きっと根底には、忘れることの出来ない辛い思いがあり、深い傷があるはずです。明るく接していても、心の底から笑えることはまだ先の話なのだと思います。そんな中でも私の前では優しく接してくれて、感謝してくれました。

私はある一人の60代くらいのおじいちゃんと仲良くなりました。Yさんといいます。とても元気な方で、炊き出しが始まる前はYさんが食事の準備などを担当していたようです。私が話しかけたことがきっかけで、毎日廊下で会うたびに笑顔で話してくれました。ボランティア最終日にYさんに「美緒ちゃんにプレゼントがあるんだよ。」と言われ、Yさんの部屋に行きました。それは靴でした。本当に嬉しくてとても感激しました。たぶん私に対する一週間分の感謝の気持ちだったのだと思います。着の身着のまま飛び出したはずだから、きっと持ち物なんて少ないのに、その中から私にあげられる物を選んでくれたのだと思うと、言葉に出来ない程嬉しかったです。そしてYさんは「いつもニコニコとあいさつをしてくれて、笑顔で話してくれて本当に嬉しかった。ここではそんなに笑顔の人はいなかったから。いつまでも笑顔を忘れないで、勉強頑張てね。また気仙沼に来てね。」と言ってくれました。笑顔で励まし、元気を与えられたらと思っていたけど、私の方が励まされ、元気をもらいました。

公民館のみなさんと話していて気づいたことがあります。それはみんな笑顔を求めているということです。ボランティアに行く前は「ガレキと言ったらダメ」だとか、「被災者と言ってはダメ」だとか被災者の人たちと話すときの注意事項のようなものを聞きました。しかしそんなことを気にする前に一度話してみたいと思います。好きなものの話、行ったことのある場所の話、学校の話、戦争の話、話せばたくさん話が自然と出てきます。少なくとも話している時は笑顔で、地震のことは思い出しません。少しでも私が笑顔を与えられるのであれば、それが地震前のような笑顔でなくとも、私がしたことへ価値があったのだと思えるのです。それほど私たち若い世代の笑顔が、若い世代がそこ（被災地）にいるということが、被災者の励みになり重要なことなのです。

最近、ボランティアが溢れかえっているということを聞きますが、ボランティアがどれだけ行っても余ることはないのではないかと思います。それほど現地の状態は壊滅的です。今でも遺体があがる川があります。まだ行方不明者を探す紙が貼られています。震災は続いているのです。しかし三重に帰ってきて思うのは、地震から2カ月が経ち、みんなの中で徐々に風化は始まってきているということです。私はどうしたらみんなの意識を落とすことなく、また継続的にボランティアが現地に行くことが出来るのか、私なりに考え行動したいと思っています。

国としては人を雇い、仕事として復興作業をする人を扱った方が、経済が回り都合がいいはずですが。しかしそこでボランティアを使うという意味は、ボランティアは現地の人にたくさんのものを与えることが出来るからです。与えられるものは一人一人違うと思います。私の場合は、炊き出しの料理を与え

れたというよりは、むしろ笑顔を与えることが出来ました。本当にたったそれだけだと思います。でもそれでいいのだと今振り返って思います。

ボランティア、特に学生のボランティアには大きな力があるのではないかと考えています。学生は時間があり、体力があり、また何にも縛られず自由に動くことが出来るからです。しかし学生にとって一週間学校を休むというのは授業や実験などあり厳しいものです。実際そのために GW は学生のボランティアが殺到し、それ以降は少なくなると言われています。夏場は今よりもっと伝染病が流行ったりするため、今の時期は多くの課題があるにも関わらず、ボランティアが減ってしまうのです。ゆえに、国、学校側の協力はとても重要なのではないのかと感じました。三重大大学は今回の震災でのボランティア活動は公欠にしてもらえます。これは学生にとっても有難く、他の学校より進んでいると感じました。このようなことが広まればと思います。

長くなってしまいました。今回にボランティアは私にとって、とても良い経験になりました。正直、壊滅状態の被災地を見ると、私に出来ることなんて何もないと思ってしまいます。でもどんな形であれ、出来ることはたくさんあるのです。温かい人たちに触れ、気仙沼がとても好きになりました。みなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。